

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院東北隅部の調査（飛鳥藤原第195次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、大極殿院や朝堂院で継続的に発掘調査をしています。本年度は、大極殿院東北隅の正確な位置と回廊の規模や構造の解明を目的とし、大極殿院東北隅部の東面回廊および北面回廊の接続部を調査しています。調査は、2017年10月4日から開始し、現在も継続中です。まだ調査は途中段階ですが、ここでは現時点での成果の一部を紹介したいと思います。

調査区は、醍醐池の南を東西に走る道路のすぐ南に位置します。ここは、かつて橿原市立鴨公小学校^{かもきみ}があった場所で、国史跡指定にともない、1974年に小学校は藤原宮跡の西部に移転しています。小学校が建設される以前は、田畑として使用されていたようで、小学校建設時の盛土の下には分厚い水田の床土が残っていました。

この床土を掘り下げると、ほぼ想定位置で大極殿院の東面回廊と北面回廊の遺構を確認することができました。北面回廊部分はほとんど削平されてしまい、礎石を固定するために入れられる拳大の根石がわずかに確認できる状態でした。いっぽう、東面回廊は基壇の高まりが残り、礎石の抜取穴と、礎石を包むように据えられた根石が検出されました。柱を立てるために、基礎の部分をしっかりと構築していたことがよくわかります。

東面回廊の基壇は、東西とも基壇縁が大きく削られ、基壇外装や雨落溝は確認できませんでしたが、遺構の上面を多量の瓦片が覆っていました。この瓦

片は、藤原宮期の瓦で、本来回廊に葺かれていた瓦が藤原宮廃絶後に投棄されたものだと思います。瓦堆積は、東面回廊の上面とその両端の傾斜部分に多く確認され、北面回廊や東面回廊から西側ではほとんどありませんでした。西側から続く東西方向の耕作溝が、東面回廊の基壇端に掘られた南北方向の耕作溝に合流していることを合わせて考えると、藤原宮は廃絶後に田畑へと転換していたものの、東面回廊の部分は里道もしくは幅の広い畔道として残っていたと考えることができます。多量の瓦片は、この里道の上面や法面部分を補強するために敷かれたのかもしれない。

その後、基壇土上面の瓦堆積も耕作溝によって破壊されていますので、東面回廊部分も耕地化したと思われますが、その中には、礎石位置を避けるように迂回する溝がありました。おそらく、その溝が掘られた時期、つまり東面回廊が耕地化した平安時代から中世には、まだ礎石は残っていたのでしょう。

礎石がいつ、どの段階で抜き取られたのかはわかりません。しかし、鴨公小学校建設後の1934年、日本古文化研究所によって大極殿院の発掘調査がおこなわれた際にはすでに抜き取られていました。このように、藤原宮の遺構が、少しずつ失われていく様子を発掘調査から知ることができました。

今回の調査は、2018年3月に終了予定です。今後、回廊の遺構を確定するべく、その構造と細部について綿密な調査をおこないます。調査の後半戦では、藤原宮の造営と、さらにそれ以前の様相について調査し、この土地の使われ方の「歴史」をあきらかにしていきたいと思っています。

（都城発掘調査部 大林 潤）



瓦堆積検出状況（南東から）



東面回廊周辺に残る瓦堆積（北東から）